

く、多数の学生が同じレーザー装置を使って実験を行うような状況では、1日の実験である程度測定を完結できるようにテーマを設計することも重要なポイントであると感じている。奈良先端科技大も総研大と同じ大学院大学であり、多くの学生は2年の在籍で修士として卒業していく。非常に人の移り変わりが激しい中で、グループとしての「集合知」を如何に保持し高めていくか、という観点はなかなか難しい問題である。一つの解法は結局「なんでも記録する」という方法で、実験室で行う行動の一部始終を全て録画して、ナレーションで何をやっているか説明をつけるのが手っ取り早いのではないかと最近考えている。

また、私の大学から車で20分程度

の距離に量子科学技術研究開発機構(QST)の関西光学研究所があり、分子研にいた頃から親交のある板倉隆二博士、坪内雅明博士、赤木浩博士らが所属されている。折角近所に素晴らしい環境があるのだから、という事で4年ほど前から共同研究をさせて頂き、学生を派遣してQSTの装置を使った実験を行っている。専門分野の近い方々との議論ができる貴重な機会であり、今後も発展させていきたいと考えている。

以上、とりとめもなく私の現在の状況について書かせて頂いた。昨年より分子研客員准教授に着任し、何度か分子研を訪

れておりましたが、コロナ以降なかなか訪問する口実(?)を作る事も難しくなりました。何か理由を見つけてまたお邪魔したいと思います。分子研が今後もその活力を失わず、分子科学の中心的存在としてプレゼンスを示し続けられます事を、OBの一人として願っております。



写真1 実験光学系は過密気味?

## 覽古考新24 | 2004年

分子研の発足当時はレーザーが爆発的に発達した時代であり、基礎研究の唯一の頼みの科研費総額が200億に満たない時代でもあった。大学では到底手の届かなかった高価な機器を使わせてもらいに協力研究をよく利用させて頂いたものである。その後はからずも分子研の一員となり、頂いた創設予算によって自分としては新しいX線分光という分野に飛び込むことができた。こうした冒険は分子研という場が与えられなければ絶対にできなかったであろう。当時の助教授は皆こうした恩恵に与り、そして日本全国に散らばっていった。

分子研も1975年の開所以来30年近くが経過し、その規模や性格も時代につれ変わってきた。80年のアニュアルレビューの名簿は僅か3頁しかないが02年のものではぎっしり詰まって10頁近くになる。同時に分子研のカバーする範囲もバイオにマテリアルにと拡大してきた。しかし、設立時の2つの目的、分子科学のピークとなる研究を行うこと、そして日本に欠けていた研究者の流動性を活発にすること、これらを実現し続けてきたことは誰の目にも明らかであろう。

来年度からいよいよ法人化がスタートする。新たに発足する自然科学研究機構の一員となる分子科学研究所の今後の展開は予断が許されないものがある。しかし、若木を植えて大きく育てる一方、移植した成木は分子科学という樹種の中でそれぞれに個性を発揮するという創設以来これまで分子研が担ってきた役割を法人化後にも変わることなく担い続けて欲しいと願っている。

分子研レターズ No.49「巻頭言：樟と樫の木」(2004年)  
宇田川 康夫 (東北大学教授)